

---

# 雨上がりの午後

正木 慶史

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

雨上がりの午後

### 【Nコード】

N2866Q

### 【作者名】

正木 慶史

### 【あらすじ】

広島弁で恋愛小説は書けるのか？

その疑問から書かれた小説。

広島出身の少女と東京出身の少年が織り成す、恋愛に成りきれないお話。

私の生まれである広島は、四国山地と中国山地に挟まれている土地柄、雨が比較的少ない。

というのにここ東京は雨が多く、今日も雨が降っている。私は偏頭痛があるので、雨が降ると頭がしくしくと痛んで困る。

その上何故か友人が家に上がり込んでいる。せつかくの日曜だというのに、私は友人を接待せねばならないという面倒を抱え込んでしまった。

「でさー、あの女、俺が嫌だつて言ってるのにしつこくついてくるんだよ。」

まったく、自分の顔に自信があるのか知らないけど、なんでああもぐいぐい来るのかな？」

目の前で熱弁を振るう美青年、ながくちあきら永口明良は喋り疲れたのか、私が出したオレンジジュースをストローで音を立てて一気に吸う。

普段学校の者から、品行方正やら王子様なぞと、聞くのも恥ずかしい言葉で誉め称えられている人間の行動だとは思えない。

「ふーん、そりゃ難儀じゃったね」

「……なんかやる気無い返答なんだけど、それが親友に向ける態度か？」

自らを親友と言う明良は、ジト目で睨んできた。朝から連絡もつけず人の家に乗り込んでくるという自分の行動は、友人に対する行動として正しいのかツツコンでやりたい。

「いろいろと言いたい事はあるんじゃないけども、まずは言っちゃろう。そんな恋愛相談をワシにしてどうするんなら。ワシがんな話に答え

られると思うとるんか?」

自慢じゃないが、私はまったくモテない。そんな私がモテてモテてしょうがないという人間にアドバイスなんかできるはずがない。

「別に、答えて貰おうとは思って無いよ。ただ話を聞いて貰いたいだけだから」

しらつと答える明良。痛む頭を押さえながら、ついでに湧き上がる殺意も抑え込む。

こいつはボンボンの坊っちゃんなので、少々自分勝手な所がある。なので朝から人の家に入り込むのも、何一つ悪い所はないと思っているのだろつ。

頭痛がして苦しんでいるやつに“話を聞け”のセリフはないだろつ。普通は“大丈夫か”くらい言うんじゃないのか。

「……話聞くだけならワシじゃなくとも良かるうが。取り巻きの女子にでも話せや」

「嫌だ。俺の性格を知ってるの松木以外に居ないもん。話すなら素の自分で話したい」

このお坊ちゃまは普段はかなりマトモな口振りだ。それは学校の生徒ほぼ全員に、“王子様”とのイタ恥ずかしい形容をされる程である。

そんな中唯一私は明良が猫をかぶってるのに気づいている。明良としてもちよつとした息抜きが必要なのか私と仲が良い。

「で、どう思う?」

「どう思う? って何がや。目的語を言えや」

「だーかーらー、俺が言い寄られてる事に関してだ」

何故かそつぽを向いて言う明良。

「はあ、彼女でも作ればそがいな事も減るんじゃないん?」

「そつだよな! だ、だから……」

「だから告白すりゃあええんじゃないか? お前の想い人っちゅう奴

に」

「そ、そっちな……」

どういう事か、明良はガツクリと肩を落とす。結構良いアイディアだと思ったのだが気に召さないらしい。

「悪い案じゃ無いと思うんじゃないの。少なくともその想い人は脈ありなんじゃろ？」

「いや、そういうことじゃなくて……ていうかまだその事を覚えてたの？」

「覚えてたも何も、そこまで昔の事じゃあるまいに。爺くさい喋り方じゃけどワシやあまだ高校生じゃ。忘れるわけないわ」

ここで私が言ってる想い人と言うのは、一年位前に明良が言った好きな人の事だ。

その時話はうやむやになってしまい、結局明良の好きな人の名前は分からないままだが、明良に好きな人が出来たというのだから応援してやろうと私は思っている。広島人は義理堅いのだ。

「で、どうなん？告白せんのか？」

「……じゃあさ、松木はどう思う？告白、した方が良いと思うか？」

質問に質問で返された。そんな答え方したら国語のテストで0点とるぞ？

「うん、まあそいつの事が好きなら告白した方がええんじゃないのか？」

「ホントか？ホントのホントにそう思うか？」

妙に尋ねてくる明良。そんな告白するのに私からの後押しがいる位の人間なのか。一度顔を見てみたい。

私は明良に対して頷くと、明良は意を決したようだ。

「わかった。なあ、松木」

「どうした。告白の決意をしたか」

「うん。頑張ってる」

私は頑張れとエールを送る。口で言うのはさすがに恥ずかしいから心の中でだが。

「ねえ、松木」

「うん？まだなんかあるんか？」

「松木、す……」

「す？」

「す……」

何事かを言い淀む明良。“す”がどうしたというのか。巢鴨か？

「す、空いたなあ、お腹が！」

アハハ。と笑みを浮かべてそう言う明良。朝早くから来ていたの  
で、もしかしたら朝ごはんを食べていないのかも知れない。

「おお、ほいじゃあコンビニに行つて、何かつまめるもんを買<sup>こ</sup>つて  
くるわ」

「うん、お願いします……」

机にうつ伏せになりながら明良は答えた。そこまで腹を空かせて  
いたとは思わなかった。

「まあ、急いで行つてくるけえちよい待つとね。なんか欲しいもん  
あるか？」

「……うう、じゃあコーヒーで」

「それだけでええんか？」

私がそう聞くと、生気のない声で、食欲ないから、と明良は答えた。  
腹が空いたと言うのに食欲がないとは意味が分からないが、まあ良  
いだろう。

それにコーヒーでも少しは腹が膨れるし、あと2時間もすれば昼  
時だ。そこまでガツツリ食べたい訳ではないのだろう。

「暇じゃなかったら飯でも食つてって貰おうと思つとったんじゃが  
な」

「ホントか！？」

私の言葉に明良は顔を上げた。

「ああ、1人分作るんも2人分作るんもあんま手間はかわらんし。  
とはいえ食欲ない言うんじゃあ……」

「大丈夫！大丈夫だから食べる！」

かなり鬼気迫る勢いで嘆願してくる明良。そこまで腹を空かせていたとは。

「そうか。じゃあ腹空かせて待つとれよ。腕によりかけて作るけるの」

私は明良の頭を撫でながらそう言う。なんというか明良の髪はサラサラしていて触り心地が良く、隙あらば撫でてしまいたくなる。

「な……急に何をするんだ！」

あきらは顔を真っ赤にする。

「ははは、広島にいる弟を思い出してな」

「弟かよ……」

何故かしょんぼりする明良。やはり高校生なんだし年下に見られるのは嫌なのだろうか。

サラダを作るため野菜を切っている時、ふと窓越しに外を眺めると雨が上がっているのに気付く。

そういえば朝から続いてた頭痛も止まっていた。明良と話していたから気付かなかった。

「はあ、あいつはいつになったら告白するんじやろうな」

つついっ独り言を言ってしまう。とはいえ、まだ告白しないのもやはり嬉しく思う。

私は素の自分で喋る事が出来る明良の事が好きだ。学校では標準語で喋っているので、広島弁で喋れるのが最高に嬉しい。

だから、明良に好きな人がいると聞かされた時はかなりショックだった。

しかし、そこは私。聞かされた瞬間、即座に案を練った。

明良の恋を応援して、明良の横に友人の立場でいよう、と。

少なくとも明良が恋人と一緒に居る時は胸が痛むだろうが、告白して玉碎し、明良と離れるよりかは遙かにいい。

だから、明良が誰かと付き合う迄は、第一の親友として傍に居たい。

「ほんととは、明良の好きな人がワシじゃったら良いんじゃないけど……」  
まあ有り得んな、という呟きは、口の中で消えた。

いきなり松木が撫でてきて驚いた。あまりの恥ずかしさに不覚にも顔を赤らめたら、言っに事欠いて弟を思い出すなんて言いやがった。

まったく、松木の天然ジゴロっぷりには驚かされる。ああいう事をしているから、男どもが手を出そうとするんだ。

松木自身はモテないなんて思い込んでいるが、実際には高校でも一番といって良い位の美人だ。そんな中俺は必死こいて松木にたかる悪い虫どもを追い払っている。

しかし、何故俺は松木に告白出来ないんだ？なぞと何か他の所に原因を求めているが、実際の所俺自身のヘタレっぷりのせいだろう。

どうしてか、松木に告白しようとする、決まって動揺してしまう。なんというか、あの目がいけない。

松木は親から躰られたといって、他人の目を見て話をする。そうやってじつと見つめられると、どうにも緊張してしまう。

「はあ、俺ってこんなキャラだったっけ？」



昔は自分から告白しなくとも、向こうから来た。しかし松木は、俺に好きな人がいると言うのを誤解して、何故か俺の恋を応援している。好きな相手から恋愛を応援されるってどんなバツゲームだよ。「ああもう！ごちゃごちゃ言っても埒があかねえ！俺は、絶対に松木に告白して見せるぞ！」

無理かも知れないけど、という情けないセリフは、口の中で消えた。

（後書き）

また王子キャラかよ、とのツツコミがあるかも知れないが、あえて無視。男が王子キャラかブサイクにしか書けないという不治の病にかかっています。

この小説は駄作です。読めないと思ったらプリントアウトし、その紙を焼いて出た灰を水に溶けば、水虫・いんきんたむしに効きます。広島弁で間違いましたらお教え下さい。と生粋の広島人は述べております。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2866q/>

---

雨上がりの午後

2011年1月26日13時06分発行